

近年、発掘調査の進展により、他の時期の遺構・遺物が確認され、客坊山遺跡群として取り扱われるようになった。

今回の発掘調査では縄文時代から近世に至る遺構や遺物が見つかっている。縄文・古墳時代の遺構は検出

きやくほうやま

- 1 所在地 東大阪市客坊町
- 2 調査期間 一九八八年（昭63）五月～一〇月
- 3 発掘機関 (財)東大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 芋本隆裕・才原金弘
- 5 遺跡の種類 集落跡・古墳群・寺院址・城跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

客坊山遺跡群は生駒山地の西麓、標高三〇〇～二三〇mに立地する。当初は客坊山古墳群と客坊廃寺・客坊城跡として周知されていた。

四世紀と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

していないが、当該期の土器・石器がみつかつている。また、古墳は調査地より東の尾根上に残っている。遺構・遺物は一〇～一六世紀のものが多く、遺構には瓦組暗渠、火葬墓、柱穴、石組穴倉、石組階段、石垣、土坑、溝、瓦溜、泉水などがある。遺物は土器、石器、瓦、木製品、金属製品、土製品、銭貨と多種に及んでいる。


木簡は泉水の下部に堆積した粘土層より出土した。泉水の形状は隅丸長方形を呈し、東西7m、南北6m、深さ〇・5mを測る。また、東側に二カ所の溝、西側に瓦質の土管による暗渠がある。これらは取水口・排水口と考えられる。共存遺物は土師器、瓦器、陶磁器、木製のミニチュア舟などがある。遺構の時期は共存遺物より一

五輪塔形板塔婆である。下端部が欠損しているため、笹塔婆になるか、小型板五輪になるものか不明。先に本誌第一五号で報告した若江遺跡第三八次調査出土板塔婆の五輪部分と比較すると、前者が板材にわずかな切り込みをいれるのみであるのに対し、本資料は各輪が写實的に表現されており、極立った対照を見せている。

〔穀力〕

· 二仙沙石

(97) $\times 15 \times 5$ 061

「yam」(パン)で大日如来を表わす種子である。板塔婆の出
土例から、字以下に四字分の種子が表記されたことが推定される
が、墨痕は不明瞭で詳かにしない。裏面には一字目と二字目の間に
補筆が認められ、釈意は判然としない。ただし、奈良市所在元興寺
極楽坊発見の小型板五輪の例では、表面に五字の種子を、裏面に名
号ないし願主・死者を墨書するので(五来重編『元興寺中世庶民信仰資
料の研究(地上発見物篇)』、一九六四年、法蔵館)、「仙」以下は人名の
可能性が指摘できよう。

近年、東大阪市内にあつては、若江遺跡や宮ノ下遺跡など、中世
の城館跡・荘園跡の発掘が相次いでいるところから、これら中世庶
民層の信仰生活を窺うことのできる資料の増加が俟たれるところだ
ある。

9 関係文献

「東大阪市区係埋蔵文化財調査一覽」(『東大阪市区文化財協会ニユ
ス』四一一 一九八九年)

(117
8・9 才原金弘
菅原章太)

